

## 「ブーゲンビリアと仏塔の親日国ミャンマーに向けた最強の医療教育支援を！」

長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科

小路武彦(こうじたけひこ) 2012年8月1日寄稿

昭和62年、「この国は多分永遠に変わらないのではないか」と杞憂したミャンマーに歴史的な国家政策の転換期が訪れている。昭和30年代の心豊かで義理と人情の日本人を思い出させる人懐こいミャンマー人の笑みが、更に天に轟く様子が目に浮かぶ。

私がミャンマーへ詣でた最初は、1987年の12月から1988年の1月にかけての一ヶ月の滞在であった。人口は6千2百万人で、国土は日本の約2倍である。当時は東海大医学部助手で、免疫組織化学の開祖Paul K Nakane教授(当時東海大)の指導の下、濱島義博団長(当時京都大医学部教授)の指揮下に入り、ラングーン(現ヤンゴン)の医学研究局(DMR)でJICA派遣専門家として肝炎ウイルスゲノムのin situ hybridization法による同定とその方法論の伝授を担当した。当時の国名はビルマであり、鎖国に近いビルマ式社会主義の真っ直中、まさに国連最貧国の状況で、極貧と強烈に黄金に輝く巨大仏塔シュエダゴンパゴダが対照的だった。しかし、仏教に精神的に支えられ何故か笑顔が絶えない親日国家であった。乾季の限りなく濃厚な青空とブーゲンビリアの花の鮮やかな色彩を今も忘れられない。一方で、ボロ切れを身に纏った人々が乏しい照明の中でうごめいている。この国に於ける基礎医学研究とは何か、違和感を感じながら、ウイルス学部門で早朝からトディパームジュース(スカイビール)という天然酒を煽っていた。時間が余りに緩やかに流れるのに驚いていた。焦ってもどうしようもない、また焦る必要もない、人生最初の経験であった。北部のインパール作戦の激戦地タウンジーを訪問し、インレイ湖やピンダヤ洞窟を訪れる中で現地人化した元日本兵に会い、歴史の現実と直面した。この最初の訪問では、本当のdiarrheaを経験し、一本10米ドルの純水で生きながらえ、帰国後も熱病を患い、結局10 Kg程無理なく痩せた。

1990年12月から1991年1月にかけて上記と同様に一ヶ月間、二度目の滞在をした。突然の新紙幣の導入(旧紙幣の無効化)を引き金に1988年に起こった社会的な大惨劇は封印され、大学が閉鎖された以外は結局外国人の目に留まる大きな変化はなく、人々は何も語らず、ただ日本のODAによる高価な先端機器が老朽化していくのを見るのみであった。この時は、長崎大医学部

講師として参加し、意を決して当時の最先端の分子生物学手法の実習講習会をDMRで開催したところ、意外な程多数の医師・医学研究者が集まり、社会的困難さとは無関係なミャンマー国民の知的向上心に大いに驚いた次第である。この訪問の際、古都マンダレーとパガンを訪れ、蒙古軍に破壊されたパゴダの巨大遺跡群に接し、嘗てのこの国の繁栄に思いを馳せた次第である。JICAの



ヤンゴンにある医学研究局(南部)での先端医学実習参加者(2012年2月)の記念撮影。女性医師の参加が目立つ。前列が日本側教員団(中央が筆者)。

評価委員として訪問された免疫学の泰斗、多田富雄教授(当時東京大)とご一緒し、貧困と圧政の中で人間性と知性を失わない国民性にエールした。多田先生は、「ビルマの鳥の木」を執筆され人間の心の深淵を抉って見せた。この訪問後ミャンマーの社会情勢は格段に悪化し、国際的孤立の中でミャンマー関係事業の多くは停止した。

1996年、ミャンマー政府の経済開放政策に呼応するように、ミャンマーJICA projectの1987年以來の同志であられる岡田茂教授(当時岡山大)が、「ミャンマー国肝癌発生要因としてのサラセミア症の鉄過剰症と輸血関連疾患の調査研究」で文科省科学研究費がん特別研究を獲得され、その後特定領域研究として2000年度まで継続した。私もその頃は米国留学を経て助教授として帰国しており、班員として参加する機会を頂いた。毎年12月にミャンマーを訪れ、DMRの病理学部門を中心として特に肝組織での鉄代謝関連遺伝子発現の検討に従事した。この頃のミャンマーは、以前と比べ、見違える程道路の整備は進み、街灯も明るくなり、車も日本の中古車が中心とはいえ顕著な社会インフラの改善が認められた。ヤンゴン市内にあった多数の竹造りの高床式住居は撤去され、海外資本による近代的ホテルが林立するに至った。実際には、通貨チャットの下落とガソリン等の高騰で住民生活は窮乏していると思われたが、底抜けの明るさと笑顔は健在であった。意外で驚いたのは、ミャンマーが国際的に孤立していたかに見えた時期、実はもっとも孤立化政策を推し進めた米国は、連邦政府ではなく目立たない州政府レベルで莫大な資金をもってDMR等に参入していた。日本が疎遠になった際に研究協力関係を築き、日本が供与した建物や機器は米国との研究の為にも利用されていたのである。同様な現象が、現在韓国政府機関(KOICA)の手で莫大な資金援助の下、再現されつつある点を指摘したい。

2001年度からは、「ミャンマー国に於ける環境毒性物質としての鉄による肝癌発症若年化に関する調査研究」で私が文科省科学研究費を頂き、9年間継続的で安定した共同作業が行われた。こうした活動の中で、ミャンマー人医療人材を日本国内で地に足の着いた教育をすることの重要性を深く認識し、これこそが親日国ミャンマーへ日本国がなすべき事と納得した次第である。実際、その後毎年(2010年以降は、長崎大学学長裁量経費で支援)訪緬し、特にここ10年間は毎回様々な組織細胞化学的方法論の実習コースを開催し、毎回の参加者は30-40名を越え、のべ350名以上のミャンマー人医学研究者を育成してきた。確かに生活環境も他のアジア諸国とそれ程差がないように明らかに向上し、ビールも泡が出て苦みもある本当に旨い「マンダレー」(赤ラベル、青ラベル)や「ミャンマー」(緑ラベル)となり、ピーナッツも発癌物質アフラトキシンを気にしないで食べられるようになった。しかしながら、薄切機器や顕微鏡などの基礎的機材は欠乏し、先端機器の維持・補修は覚束なく、相当の資金を導入しても砂漠に水の感がある。先端機器の老朽化を見て思うには、先ず機器よりも「人間の育成」、自前の機材による独創的研究や医療貢献を可能とする教育が必要で、将来性のある有意の医学研究者を日本で教育し、人的基盤の抜本的整備に日本は支援すべきではないかということである。

長崎大学では、2007年2月にミャンマー国保健省医学研究局及び医科学局との間で学術交流協定を締結し、ミャンマー国全ての医、歯、薬、看護系等大学との交流が公的となった。2008年には学生実習中古(再調整後)の光学顕微鏡25台を病理診断用に寄贈した。また様々な費用を捻出して、これまで9名のミャンマー人医師を長崎で長・短期研修を行わせた。彼らが母国で出世して行く様を見て、また日本国に深く感謝する姿を見て疲労が吹き飛ぶのを感じる。

数年前に、ミャンマー国中央部のNay Pyi Taw(ネーピードー)に突然遷都することが決まり、本当かと思っていたら大変な大都市計画のもと建設が進められ、今ではヤンゴンからコンクリート舗装の道路が一直線に伸び、超豪華な国会議事堂も完成している。2008年5月サイクロンNargisを被災し、14万人を一瞬にして失う想像を絶する破壊を被っても首都建設への情熱は不変であった。この国が世界のグローバル化の中で、どのような位置付けを狙っているのかは勿



ナルギス被災地の小学生へ長崎学生NPO(BOAT)からの支援物資の配布。小路が間をとりもった。我々は、教育(学問)こそ困難な現実を切り拓くと信じる。

論不明であるが、120を越える少数民族を抱え、また大多数の貧困者を抱え、困難な状況の中にあることは間違いない。

しかしながら、この極めて親日的で純朴で人間性豊かな愛せる人々が未来を描けるよう、微力ながら医学・医療分野の人造りの点で貢献出来ればと祈念する次第である。もはや、これは決して先の太平洋戦争の負の遺産の清算等ではなく、親しいアジアの隣人としての責務である。